○中国文化学会　平成20年度大会　講演会

金沢八景の歴史と変遷

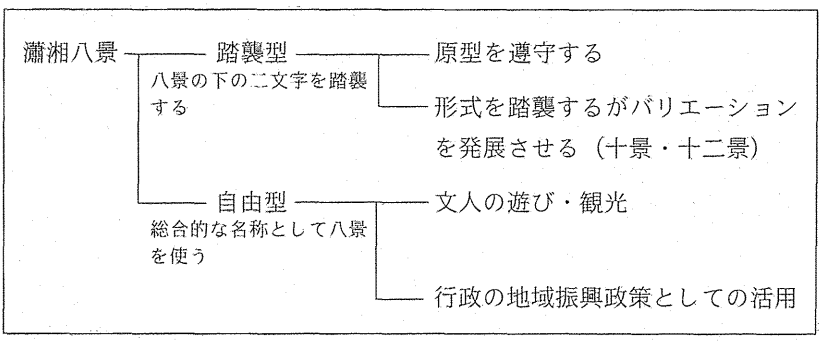
永　井　　晋

一　日本における八景の分類と変遷

日本における中国文化の受容は、長江流域を中心とした江南地方の文化を選択的に受け入れ、消化してきたことに特徴がある。八景の遊びを受容し、独自の観光文化に発展させたのもそのひとつといえる。

日本の八景の原型となるのは、中国北宋時代に成立した瀟湘八景である。瀟湘八景は、湖南省の洞庭湖を中心とした「瀟湘夜雨・洞庭秋月・煙寺晩鐘・遠浦帰帆・山市晴嵐・漁村夕照・江天暮雪・平沙落雁」から構成される。湖を中核とした地域の美しい景観を、夜雨・秋月・晩鐘・帰帆・晴嵐・夕照・暮雪・落雁の二文字で表現される八つの情景に切り取って表現することが約束となっていた。瀟湘八景詩歌には、「怨」と「愁」が通奏低音として流れていると指摘されている。八景を選んで文学・美術的に表現する遊びは、中国文明をモデルとして発展を遂げた東アジア漢字文化圏、中国・朝鮮・日本・越南・シンガポールやシルクロードの諸国に広まった。現在も選定が続けられている八景の類型を分類すると、下図のようになる。

図１　八景選定の形式分類



日本に八景の遊びが伝来したのは鎌倉時代後期のことで、渡来僧一山一寧が賛文を寄せた瀟湘八景図や、大休正念の弟子鉄庵道生（1262 ～ 1331年）が

選定した博多八景が確認できる最初のものである。博多は朝廷の大宰府や鎌倉幕府の鎮西探題の置かれた政治都市で、中国人居留区が形成され、中国に向かう貿易船も建造された。室町時代になると、八景の遊びは京都の禅僧・武家・公家に広まり、瀟湘八景をもとにした水墨画や詩歌がつくられた。

江戸時代になると、八景の遊びは江戸・大坂・京都といった都市住民にも広まり、遊びから観光へと姿を変えていくことになった。それと共に、八景は日本中で選定されるようになり、北は函館八景から南は首里八景まで、日本の勢力圏全域にひろまることになった。江戸時代に流行した見立ての遊びにも八景は取り入れられた。商家の女性の室内の情景を選んだ座敷八景は、扇子晴嵐・行燈夕照・琴柱落雁・塗桶暮雪・悦架帰帆・時計晩鐘・台子夜雨・鏡台秋月と八景を構成する下の二文字に、道具が重ねられている。

江戸時代を代表する八景は、京都・江戸といった大都市近郊の観光地として賑わいを見せた近江八景・金沢八景である。京都では後水尾天皇が詠んだ修学院八景のような正統的な八景も撰ばれたが、近江八景は観光地として発展し、数多くの旅行客を迎え入れ、浮世絵・観光案内・輸出用絵葉書などの土産も生み出されていった。近江八景・金沢八景が瀟湘八景と決定的に異なるのは、文人の遊びとして選定された景勝地から観光地へと大きく脱皮したことで、怨や愁といった暗い情念が取り払われ、明るく楽しいイメージが提示されたことである。

他にも、水戸藩主徳川斉昭が水戸藩領内の景勝地を選び、水戸八景を撰んだ。目的は藩士の心身健脚を鍛錬するための順路選定で、完歩すると九一キロになる。その中継ポイントに八景が置かれた。神奈川県横須賀三浦行政センターが選定した三浦半島八景も、ウォーキングブームに乗って県民や観光客に三浦半島をあるいてもらおうと選定した市民参加の八景である。

八景の遊びが充分に咀嚼されてきたところで、十景・十二景とバリエーションを発展させたものが次々と撰ばれていった。これら「瀟湘八景」を原型として踏襲する事を意識した八景やバリエーションとしての十景・十二景を、「踏襲型」とよんでおこう。

一方、その土地の景観や見所を八種類選ぶ名数として八景を使ったものの、「瀟湘八景」のスタイルにとらわれない八景も数多く成立していった。瀟湘八景は、洞庭湖を抱え込むために親水性が高く、水墨画などで選ばれる画図も霧に煙っていたり、雪が降っていたりと、適合する土地は限られていた。そのため、八景が東アジアの漢字文化圏全域に広がっていく時に、下の二文字はその

土地の気候や地勢にあわせて適宜入れ替えが行われた。

ところが、行政が地域振興政策として選定する新しい八景は、住民に応募を呼びかけて八つの景観を選んでもらう市民参加型の形式をとるため、八景撰びの文化が軽視される傾向がある。踏襲型の八景は、「洲崎の晴嵐」・「琴柱の落雁」など一定の条件のもとに八つの情景を選んで命名するので口ずさめるフレーズとなる。自由型の八景にしてしまうと、「横浜ベイサイドマリーナの夕景」・「海と緑を巡るシーサイドライン・」など定型化してリズムをもたせる配慮がなく、美しいものを八個選んだだけという安易な八景の乱立をうみだしている。住民に地域に対して親しんでもらおうという試みはよいが、八景がひとつの形式をもった遊びの文化だという事を忘れてほしくないものである。

二　金沢八景の特性

金沢八景は、「洲崎晴嵐」・「瀬戸秋月」・「小泉夜雨」・「乙艫帰帆」・「称名晩鐘」・「平潟落雁」・「野島夕照」・「内川暮雪」で構成される。瀟湘八景にもとづく踏襲型で、洞庭湖の代わりに平潟湾を中心に据えている。金沢八景の浮世絵に霧に煙る情景はなく、カラッと晴れた風景が描かれている。瀟湘八景を理念として踏襲しているが、杭州の西湖十景を直近のモデルとしているためである。

金沢八景の詩歌は江戸時代初期には詠まれているが、現在の名称に固定されたのは、南明(一六四四～八三)の亡命僧心越（一六三九~九六）が鎌倉を訪れた晩年の事と考えられている。能見堂がこの時の漢詩を金沢八景絵図に刷り込んだことから、心越の漢詩による金沢八景が広く流布することとなった。能見堂版八景は、江戸時代前期の金沢の様子を伝える一枚物の案内図として数多く印刷され、金沢八景絵図を代表するもののひとつとなった。

その後、泥亀新田の開発で、平潟湾の湾奥部が埋め立てられた。能見堂の山裾にあった内川暮雪が海から切り離されたことで、平潟湾の南側に再設定されたのである。歌川広重画で有名な金龍院版八景は、内川暮雪は瀬ヶ崎とその後景に雪を被った三浦半島の山並みを描いている。

江戸時代は、金沢八景が観光地として発展するのにプラスに働く要因がいくつも重なっていた。第一は、江戸幕府が人の移動を厳しく制限するなかで許可が取りやすかった信仰の旅社寺参詣の順路に入っていたことである。落語にもなった「江戸→大山→江ノ島→鎌倉→金沢→江戸」を順路とした大山詣は江戸近郊の人々に人気のコースであり、この順路に組み込まれたことで金沢八景は多くの旅人を受け入れた。金沢に入る道は、東海道を保土ヶ谷宿で分かれて南下して金沢に入る吉田道で、吉田道は瀬戸で鎌倉から瀬戸を経て浦賀奉行所に向かう浦賀道の支線と合流した。この沿道に、金沢八景を北から見下ろす展望台能見堂があった。金龍院は金沢八景の中心に位置し、八方を見渡す見晴台九覧亭を設けていた。それと共に、瀬戸は金沢藩一万二千石の陣屋が置かれた地方都市となっていた。

江戸幕府が滅亡して移動の制限がなくなると、横須賀軍港と金沢八景を組み合わせた周遊旅行が成立する。明治政府が海軍・造船の拠点として重点開発した横須賀は、近代日本の最先端をゆく街として発展した。海軍の需要に応えたハイカラな商品の並ぶ繁華街は、非日常的な空間を楽しむ場所となった。汽船で東京から横須賀に入って見物し、遊覧船で金沢八景に移動、船か汽車で東京に帰るという新たな観光ルートの成立である。大正八年に横須賀海軍航空隊が設立されると、金沢の観光名物に最新鋭の飛行機が加わり、金沢八景は横須賀軍港北隣の観光地として発展を続けることになった。

金沢八景が突出した理由は、いくつかある。第一に鎌倉時代から船遊び・紅葉狩りで知られた観光地であったこと、第二に金沢北条氏が本拠地とした事で鎌倉の武家文化を色濃く残した歴史と文化と伝説の富む街であったこと、第三に歌川広重の金沢八景浮世絵に象徴されるビジュアルな宣伝材料が数多く印刷されたこと、第四に金沢藩一万二千石の陣屋があったことで交通の便がよくかつ武士の集住する治安のよい街が形成されたことである。景色のよい観光地は、日本中に数多くある。しかし、歴史に富む街として発展した観光地は京都・鎌倉に代表されるように数少ない。近年、奈良も考古学的な成果を元に歴史をイメージする幻想空間の復元に力を注いでいる。

太陽や満月に象徴される明るい空間、歴史に富む文化遺産の豊かな街、海に開かれた観光の街、金沢八景の浮世絵は江戸近郊の観光地金沢の姿を象徴している。そして近代、金沢八景は新たな観光資源であると共に大口の消費者であった海軍を迎えてさらに発展するが、日中十五年戦争の中で膨張する海軍の施設に呑み込まれて観光地としての終焉を迎えることになる。

〈参考文献〉

・神奈川県立金沢文庫特別展図録『金沢八景―歴史・景観・美術―』（平成５年）
・横浜市金沢区役所区政推進課編『ゆめはま2010プラン　区の魅力を高める事業マスタープラン　新金沢八景づくり』（平成７年）
・神奈川県立金沢文庫企画展図録『まぼろしの金沢八景―失われた風景とくらし―』（平成10年）
・堀川貴司『瀟湘八景―詩歌と絵画に見る日本化の様相―』（臨川書店　平成15年）
・神奈川県立金沢文庫企画展図録『目でみる近代の金沢』（平成15年）
・青木陽二・榊原映子編『八景の分布と最近の研究動向―過去の景観評価データ―』（国立環境研究所研究報告197号　平成19年）

（神奈川県立金沢文庫主任学芸員）